

当館所蔵 林羅山旧蔵書（漢籍） 解題②

土屋裕史

はじめに

本稿は、国立公文書館（内閣文庫）が所蔵する漢籍のうち、林羅山が所蔵していた書物を調査した前稿①（第47号所収）に続くものである。

引用文献・凡例等については、前稿を参照されたい。

022 論語或問 二〇巻

四冊（宋）朱熹撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二七五—〇一二二〕

『論語或問』は、孔子（前五五二？～前四七九）の言行録である『論語』の解説書。朱熹に対して弟子が『論語』に関する質問をし、その質問に朱熹が解答するという「或問」形式で解説を行っている。朱熹『論語集註』を補完するものである。

朱熹（一一三〇～一二〇〇）は、字は元晦、号は晦庵、朱子と尊称される南宋時代の大学者。詳しくは、拙稿①（『北の丸』第43号所収）の「20『四書集註』（六九頁）を参照。

なお、毎冊尾に「道春氏」「羅山道春 附朱」などの朱書あり。

【版式】

四周単辺（二二・八糎×二六・八糎）無界 毎半葉二二行 毎行二二字 小字双行

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、毎表紙、毎冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「内閣／文庫」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

【刊行年代等】

●江戸初写…当館目録、三二頁（上段）。林羅山手校本。

023 孟子 一四巻

五冊（漢）趙岐注

林羅山旧蔵〔請求番号 別〇四八—〇〇〇三〕

『孟子』は、戦国時代の思想家である孟軻（前三七二～前二八九）の言行録で、儒学において重要な書物の一つである。

趙岐（？～二〇二）は、字は邠卿、京兆長陵（陝西省咸陽市）出身の人。

経書の学問に精通し、漢に仕えて「太常」（宗廟の儀礼をつかさどる官職）となった。漢の献帝の建安六年（二〇二）に九〇余歳で没した。

なお、第一冊尾に「鳳池一見」の朱書あり。「鳳池」は、林信寛（？）一七四四）の号であり、林家第五代・林鳳谷の弟である。

【版式】

四周双辺（二一・二糎×一六・一糎） 有界 每半葉八行 每行一七字 注
小字双行 版心大黒口 双花口魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「勉／亭」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

【刊行年代等】

●〔慶長〕刊（古活・第五種本）…当館目録、三二頁（下段）。

●〔慶長中刊本〕…『増補 古活字版之研究』上巻、三七八頁。

024 孟子或問 一四卷

一冊（宋）朱熹撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二七五—〇一三四〕

『孟子或問』は、『孟子』（前掲「023 孟子」を参照）の解説書で、『論語或問』（前掲「022 論語或問」を参照）と同じく、朱熹とその弟子との問答

形式で解説を行っている。朱熹については、前掲「022 論語或問」を参照。なお、冊尾に「羅山子 附朱了」の朱書あり。

【版式】

四周单辺（二五・〇糎×一六・七糎） 有界 每半葉二二行 每行二三字 注
小字双行 版心白口 双花口魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、冊首にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、表紙、冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、冊首、冊尾にあり。

【刊行年代等】

●朝鮮刊：当館目録、三二頁（下段）。林羅山手校本。

025 四書蒙引 一五卷

一四冊（明）蔡清撰（明）敖鯤校

林羅山旧蔵〔請求番号 二七七—〇〇四六〕

『四書蒙引』は、『大学』・『中庸』・『論語』・『孟子』の四つの書物の注釈書で、朱熹の『四書集註』をもとに解説を行っている。

蔡清（一四五二—一五〇八）は、字は介夫、虚齋先生と称せられた。成化二〇年（一四八四）の進士で、南京国子祭酒となった。著書に『易経蒙引』があり、この書については、前掲①（『北の丸』第47号所収）の「003 蔡虚齋先生易経蒙引」（二二二頁）を参照。

なお、毎冊尾(第三・四冊のみ欠)に「道春塗朱」「夕顔巷主道春法印朱句」などの朱書あり。

【版式】

四周双辺(二〇・〇×糲二三・九糲) 有界 每半葉一〇行 每行二四字 注
単行 版心白口 単黒魚尾

【蔵書印等】

- 「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。
- 「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。
- 「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾にあり。
- 「大学／蔵書」の印が、毎冊首にあり。
- 「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。
- 「日本／政府／図書」の印が、毎冊首にあり。

【刊行年代等】

●明刊：当館目録、三六頁(下段)。林羅山手校本。

026 新刻註釈四書人物備考 四〇卷

四冊 (明) 薛応旂撰 (明) 朱焯注

林羅山旧蔵〔請求番号二七七一〇二〇七〕

『新刻註釈四書人物備考』は、「四書」つまり儒学で重視される『大学』・『中庸』・『論語』・『孟子』の四つの書物に登場する人物について、伝記と筆者の論評とを載せる。収録された人物は、中国古代の伝説上の人物である「神農」から、孔子を招聘しようとした謀反人「佛肸」までである。薛応旂(生没年未詳)は、字は仲常、武進(江蘇省常州市)出身の人。

嘉靖一四年(一五三五)に官吏登用試験に合格し、浙江提学副士となった。著書に『宋元通鑑』・『憲章録』などがある。

なお、毎冊尾に「道春」の朱書あり。

【版式】

四周单辺(一九・八糲(うち龍頭一・六糲)×一二・〇糲) 有界 每半葉一一行 每行二二字 注小字双行 版心大黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

- 「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。
- 「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。
- 「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾にあり。
- 「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。
- 「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

【刊行年代等】

第一冊首の序文には「嘉靖丁巳秋八月既望 武進薛応旂仲常」とあり。「嘉靖丁巳」は嘉靖三六年(一五五七)にあたる。

●明刊：当館目録、三六頁(下段)。林羅山手校本。

030 新鐫項仲昭先生四書嫻嬛集註 一九卷

五冊 (明) 項煜撰

林羅山旧蔵〔請求番号二七六一〇〇四一〕

『新鐫項仲昭先生四書嫻嬛集註』は、朱熹の『四書集註』についての注釈書で、下段に『四書集註』の本文を、上段に他書の引用を中心とした注釈を附している。

項煜については、事績など未詳。

【版式】

四周单边（二二・七糎×二二・〇糎） 無界 版心白口

〔上段〕 每半葉二九行 每行三〇字 注単行

〔下段〕 每半葉九行 每行一七字 注小字双行

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「胡蝶洞」の印が、第五冊尾にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「寛政庚申」の印が、每冊尾にあり。

※「寛政庚申」は、寛政二年（一八〇〇）にあたる。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首にあり。

【刊行年代等】

●明刊：当館目録、三九頁（上段）。

032 助語辞

一冊（明） 盧以緯 撰 胡文煥 校

林羅山旧蔵〔請求番号 二七八—〇〇四六〕

『助語辞』は、「也・矣・焉」や「於」などの「助字」（前置詞・副詞・接続詞・句末詞など）について、その用法や意味を解説した字書である。盧以緯が著した『助語』を手に入れた胡文煥が、校訂を加えて『助語辞』として刊行したものである。

盧以緯（生没年未詳）は、字は允武、元時代の人で、永嘉（浙江省温州市）出身の人。胡文煥（生没年未詳）は、字は徳甫、明の万曆時代の人で、銭塘（浙江省杭州市）出身の人。書籍の刊行を生業とし、数百種類の書物からなる『格致叢書』を刊行している。

なお、冊尾に「道春」の墨書あり。

【版式】

無辺 無界 每半葉一一行 行二〜三三 注小字双行

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、冊首にあり。

「読耕齋」の印が、冊尾にあり。

「林氏／蔵書」の印が、冊首にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、表紙、冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、冊首、冊尾にあり。

【刊行年代等】

●江戸写：当館目録、四五頁（上段）。

034 古今韻会举要 三〇巻 礼部韻略七音三十六母通攷一卷

二〇冊（元） 熊忠 撰

林羅山旧蔵〔請求番号 別〇四九—〇〇〇八〕

『古今韻会举要』は、漢字を「韻」（音の末尾の響き）によって分類整理し、発音と意義の説明を加えた字書で、熊忠が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿②（『北の丸』第44号所収）の「34 古今

韻会挙要」(七四頁)を参照。

【版式】

左右双辺(二九・四糎×一二・三糎) 有界 每半葉八行 毎行二二〇二二三
字 注小字双行 版心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第二冊首にあり。

「羅ノ山」の印が、毎冊尾(第三冊を除く)にあり。

「林氏伝家図書」の印が、第一冊首にあり。

「林氏ノ蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「昌平坂ノ学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾(第三冊を除く)にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「日本ノ政府ノ図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「嘉隠」(白文)の不明印が、毎冊首(第三・五・八・一六・一七冊を除く)にあり。

「昌■ノ道人」の不明印が、第二・七・一一・一四・一八冊首にあり。

「劉ノ氏」(鼎形)の不明印が、第二・七・一一・一四・一八冊首にあり。

「■ノ輔」の不明印が、第七・一一・一四・一八冊首にあり。

【刊行年代等】

●元刊：当館目録、五三頁(上段)。

●元刊本：「関東現存宋元版書目」、二三八頁。

●元刊：「宋元版所在目録」、五七頁。

二〇冊 (漢) 司馬遷撰 (宋) 裴駰集解

(唐) 司馬貞索隱 張守節正義 (明) 黃汝良等校

林羅山旧蔵〔請求番号 二七九—〇〇〇八〕

『史記』は、中国古代の伝説時代から漢の武帝までを載せる歴史書で、

正史の一つである。「本紀」一二巻では帝王を中心に年月順に事件を記し、

「表」一〇巻では年表を記し、「書」八巻では礼楽や天文などを記し、「世

家」三〇巻では諸侯の事績を記し、「列伝」七〇巻では英雄・文人・政治家

などの事績を記しており、このような体裁を「紀伝体」という。注釈書に、

南朝宋の裴駰『史記集解』唐の司馬貞『史記索引』唐の張守節『史記正

義』があり、『史記』の「三家注」といわれている。

司馬遷(前一四五?〜前八六?)は、字は子長、夏陽(陝西省韓城市)

出身の人。元封三年(前一〇八)、父親の跡を継いで「太史令」(歴史官の

長)となり、『史記』の著述を開始する。また、異民族に捕らえられた李陵

を弁護したことで「宮刑」に処せられるが、大赦によって出獄すると、著

述に専念して『史記』一三〇巻を完成させた。

【版式】

左右双辺(二九・五糎×一四・〇糎) 有界 每半葉一〇行 毎行二〇〇二

二字 注小字双行 版心線黒口 単黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏ノ蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「昌平坂ノ学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾にあり。

「大学校ノ図書ノ之印」の印が、第一冊首のみにあり。

「大学ノ蔵書」の印が、毎冊首(第一冊のみ欠)にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「内閣／文庫」の印が、第一冊首、第一冊尾のみにあり。

【刊行年代等】

万曆二四年(一五九六)の「南京国子監新鐫史記序」あり。

●明万曆二四刊(南監)：当館目録、五七頁(下段)。

036 史記 一三〇卷

五〇冊 (漢) 司馬遷撰 (宋) 裴駟集解

(唐) 司馬貞索隱 張守節正義

林羅山旧蔵〔請求番号 二七九—〇〇一八〕

本書の内容や撰者については、前掲「035 史記」を参照。

【版式】

四周双边(二二・八糎×一七・一糎) 有界 每半葉八行 毎行一七字注

小字双行 版心中黒口 双花口魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「内閣／文庫」の印が、毎冊首、毎冊中、毎冊尾にあり。

【刊行年代等】

●慶長刊(古活・第一種本)：当館目録、五七頁(下段)。

●慶長十一年以前刊：『増補 古活字版之研究』中巻、八二五頁。

040 前漢書 一〇〇卷

二〇冊 (漢) 班固撰

(唐) 顔師古注 (明) 江汝璧校

林羅山旧蔵〔請求番号 二七九—〇〇五〇〕

『前漢書』は、劉邦(前二五六～前一九五)が建国した漢王朝(前二〇

六～後八)の歴史を記した正史で、班固(三二～九二)が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿②『北の丸』第44号所収の

「36 漢書」(七六頁)を参照。

【版式】

四周双边(二二・五糎×一四・四糎) 有界 每半葉一〇行 毎行二字注

小字双行 版心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾にあり。

「大学校／図書／之印」の印が、毎冊首にあり。

「大学／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「内閣／文庫」の印が、第一～三冊の冊首、冊中、冊尾のみにあり。

【刊行年代等】

●明嘉靖八・九刊(南監・万曆二六修)：当館目録、五九頁(上段)。

041 後漢書 九〇卷 志三〇卷

二〇冊 (宋) 范曄撰 (唐) 李賢注
(志) (晋) 司馬彪撰 (梁) 劉昭注
林羅山旧蔵〔請求番号 二七九—〇〇七五〕

『後漢書』は、劉秀(前六—五七)が王莽を倒して再興した後漢王朝(二五—二二〇)の歴史を記した正史で、范曄(三九八—四四五)等が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿②『北の丸』第44号所収)の「37 後漢書」(七七頁)を参照。

【版式】

四周双辺(二一・三糎×一四・四糎) 有界 每半葉一〇行 每行二二字 注小字双行 版心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

※『後漢書』二八冊〔請求番号 二七九—〇〇七四〕に「江雲渭樹」の印なし。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

【刊行年代等】

●明嘉靖八・九刊(南監・天啓三修)：当館目録、六〇頁(上段)。

042 後漢書 九〇卷 志三〇卷

三四冊 (宋) 范曄撰 (唐) 李賢注

『北の丸』第48号 当館所蔵 林羅山旧蔵書(漢籍) 解題②

(志) (晋) 司馬彪撰 (梁) 劉昭注
林羅山旧蔵〔請求番号 二七九—〇〇七九〕

本書の内容や撰者については、前掲「041 後漢書」を参照。
なお、第三四冊尾に「癸酉之夏写旧本点訖 道春氏」の墨書あり。「癸酉」は、寛永一〇年(一六三三)にあたる。

【版式】

四周双辺(二一・七糎×一六・四) 有界 每半葉九行 每行一七字 注小字双行 版心中黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「大日本／帝国／図書印」(乙)の印が、每冊首にあり。

「東京／図書／館蔵」の印が、每冊首(第二二冊のみ冊中)にあり。

「内閣／文庫」の印が、每冊首、每冊中、每冊尾にあり。

【刊行年代等】

●寛永刊(古活)：当館目録、六〇頁(下段)。林羅山手校手跋本。

●寛永中刊：『増補 古活字版之研究』中巻、八二五頁。

043 三国志 六五卷

一四冊 (晋) 陳寿撰 (宋) 裴松之注
林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇一五〕

林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇二五〕

『三国志』は、後漢時代（二五〇—二六〇）末期の争乱から、魏・蜀・呉の三国鼎立、そして晋による統一（二六五年）までの歴史を記述した正史で、陳寿（二三三—二九七）が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿②（『北の丸』第44号所収）の「38 三国志」（七八頁）を参照。

【版式】

左右双边（二一・七糎×一三・六糎） 有界 每半葉二二行 每行二三字 注
単行 版心線黒口 単黒魚尾

〔蜀志〕 左右双边（二三・七糎×一四・二糎） 有界 每半葉一〇行 行二
一字 注小字 双行 版心白口 単黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一・九・一三冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「大学校／図書／之印」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

「内閣／文庫」の印が、每冊首、每冊中、每冊尾にあり。

【刊行年代等】

「蜀志」は「万曆二十八年刊」（二六〇〇）の北監本を補配する。

●明万曆二四刊（南監）（蜀志一五卷北監刊）…当館目録、六一頁（上段）。

『晋書』は、司馬炎（二三六—二九〇）が建国した晋王朝（二六五—四二〇）の歴史を記した正史で、房喬（房玄齡ともいう、五七八—六四八）等が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿②（『北の丸』第44号所収）の「40 晋書」（八〇頁）を参照。なお、羅山旧蔵本『晋書』については、同「46 晋書」（八五頁）に収録する。

【版式】

左右双边（二一・六糎×一六・二糎） 有界 每半葉二〇行 每行二〇字 版
心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一三冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、每冊首（第一八冊のみ欠）にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「大学／蔵書」の印が、每冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

「内閣／文庫」の印が、每冊首（第一〇・一一・一五・一七・一八・一九・二

九・二二冊欠）每冊中（第一〇・一一・一五・一七・一八・一九・二

二二冊欠）、每冊尾（第一〇・一一・一五・一七・一八・一九・二

二冊欠）にあり。

※林鷲峯手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●元刊（万曆一〇修）…当館目録、六一頁（下段）。

045 宋書 一〇〇卷

一一〇冊 (梁) 沈約撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇三四〕

『宋書』は、劉裕(三六三〜四二二)が建国した宋王朝(四二〇〜四七九)、「劉宗」ともいう)の歴史を記した正史で、沈約(四四二〜五二二)が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収)の「48 宋書」(八七頁)を参照。

【版式】

四周双辺(二二・八糎×一五・四糎) 有界 每半葉九行 每行一八字版
心線黒口 三黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第三冊首にあり。
「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。
「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙(第六・一三冊のみ欠)、每冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「内閣／文庫」の印が、每冊首、每冊中、每冊尾にあり。

※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆二二刊(南監) ……当館目録、六一頁(下段)。

046 南齊書 五九卷

八冊 (梁) 蕭子顯撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇三六〕

『南齊書』は、蕭道成(四二七〜四八二)が建国した齊王朝(四七九〜五〇二)の歴史を記した正史で、蕭子顯(四八九〜五三七)が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収)の「50 南齊書」(八八頁)を参照。

【版式】

四周双辺(二〇・一糎×一三・八糎) 有界 每半葉九行 每行一八字版
心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。
「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。
「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙(第一・二冊のみ欠)、每冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

「内閣／文庫」の印が、每冊首、每冊中、每冊尾にあり。

※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆一六・一七刊(南監) ……当館目録、六二頁(上段)。

047 梁書 五六卷

六冊 (唐) 姚思廉 等奉勅撰

林羅山旧蔵〔請求番号 三二〇—〇〇一三〕

『梁書』は、蕭衍(四六四—五四九)が建国した梁王朝(五〇二—五五七)の歴史を記した正史で、姚思廉(五五七—六三七)等が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収の「51 梁書」(八九頁)を参照。

【版式】

四周双边(二〇・五糎×一五・〇糎) 有界 每半葉一〇行 每行二二字版
心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。
「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。
「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙(第一冊のみ欠)、每冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首のみにあり。

※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆三刊(南監)：当館目録、六二頁(上段)。

048 陳書 三六卷

四冊 (唐) 姚思廉 等奉勅撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇四五〕

『陳書』は、陳霸先(五〇三—五五九)が建国した陳王朝(五五七—五八九)の歴史を記した正史で、姚思廉(五五七—六三七)等が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収の「52 陳書」(九〇頁)を参照。

【版式】

四周双边(一九・八糎×一三・九糎) 有界 每半葉九行 每行一八字版
心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。
「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。
「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、每冊尾にあり。
「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。
※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆一六刊(南監)：当館目録、六二頁(下段)。

049 魏書 一一四卷

二四冊 (北齊) 魏収 等奉勅撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇五六〕

『魏書』は、拓跋珪(三七一—四〇九)が建国した魏王朝(三八六—五三四)、「北魏」ともいう)の歴史を記した正史で、魏収(五〇六—五七二)等が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収の「54 魏書」(九一頁)を参照。

【版式】

左右双辺（一九・八糎×二四・一糎） 有界 每半葉一〇行 毎行二字注
小字双行 版心線黒口 単黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲滑樹」の印が、第一冊首にあり。
「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。
「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙(第一七冊のみ欠)、毎冊尾(第一冊のみ欠)にあり。

「大学校／図書／之印」の印が、毎冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首(第二二冊のみ欠)にあり。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「内閣／文庫」の印が、毎冊首、毎冊中(第二〇冊のみ欠)、毎冊尾(第二〇冊のみ欠)にあり。
※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆二四刊(南監・天啓修) ……当館目録、六二頁(下段)。

050 北齊書 五〇卷

六冊 (唐) 李百薬 奉勅撰
林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇六四〕

『北齊書』は、高洋(五二九〜五五九)が建国した齊王朝(五五〇〜五七七)の歴史を記した正史で、李百薬(五六五〜六四八)等が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収の「56 北齊書」(九二頁)を参照。

【版式】

四周双辺(二〇・三糎×一三・九糎) 有界 每半葉九行 毎行一八字版
心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲滑樹」の印が、第一冊首にあり。
「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。
「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾にあり。
「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「内閣／文庫」の印が、毎冊首、毎冊中、毎冊尾にあり。

※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

●明万曆一六・一七刊(南監) ……当館目録、六三頁(上段)。

051 周書(後周書) 五〇卷

六冊 (唐) 令狐徳棻 等奉勅撰
林羅山旧蔵〔請求番号 三二〇—〇〇二二〕

『周書』(後周書)は、宇文覚(五四二〜五五七)が建国した周王朝(五七〇〜五八二)、「北周」ともいう)の歴史を記した正史で、令狐徳棻(五八三〜六六六)等が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収)の「58 周書(後周書)」(九四頁)を参照。
【版式】
四周双辺(一九・四糎×一三・九糎) 有界 每半葉九行 毎行一八字版
心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、毎冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

※林鷺峯手校本↓「手跋」も現存する。「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆一六刊（南監）…当館目録、六三頁（上段）。

052 隋書 八五卷

二〇冊（唐）魏徵等奉勅撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇六八〕

『隋書』は、楊堅（五四一〜六〇四）が建国した隋王朝（五八一〜六一

八）の歴史を記した正史で、魏徵（五八〇〜六四三）等が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収）の

「59 隋書」（九四頁）を参照。

【版式】

四周双边（二〇・一糎×一三・八糎） 有界 每半葉九行 每行一八字 注

小字双行 版心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙（第一・三・七冊のみ欠）、毎冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、第二・三冊の冊首と冊尾のみにあり。

「内閣／文庫」の印が、毎冊首（第一冊のみ欠）、毎冊中（第一冊のみ欠）、

毎冊尾（第一冊のみ欠）にあり。

※林鷺峯手校本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆二二・二三刊（南監）…当館目録、六三頁（下段）。

053 南史 八〇卷

二〇冊（唐）李延寿撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇七五〕

『南史』は、中国大陸が南北に分かれて支配されていた南北朝時代、南

半分を支配した南朝（四二〇〜五八九）の「宋」・「齊」・「梁」・「陳」の

四王朝の歴史を記した正史で、李延寿（生没年未詳）が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収）の「62 南史」（九六頁）を参照。

南史」（九六頁）を参照。

【版式】

四周双边（一九・九糎×一三・九糎） 有界 每半葉九行 每行一八字 版

心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「内閣／文庫」の印が、第一冊の冊首・冊中・冊尾のみにあり。

※林鷲峯手校本。

【刊行年代等】

●明万曆一七〇一九刊(南監) ……当館目録、六三頁(下段)。

054 北史 一〇〇巻

三〇冊 (唐) 李延寿撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八〇—〇〇八一〕

『北史』は、中国大陸が南北に分かれて支配されていた南北朝時代、北半分を支配した北朝(三八六—五八二)の「魏」・「齊」・「周」と「隋」の四王朝の歴史を記述した正史で、李延寿(生没年未詳)が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収の「64 北史」(九八頁)を参照。

【版式】

四周双辺(二〇・〇糎×一四・二糎) 有界 每半葉九行 每行一八字 版心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾(第六・一九冊のみ)にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

※林鷲峯手校本手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆刊(南監) ……当館目録、六四頁(上段)。

055 旧唐書 二〇〇巻(卷一—四補写)

四〇冊 (晋) 劉昫等奉勅撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八一—〇〇〇二〕

『旧唐書』は、李淵(五六六—六三五)が建国した唐王朝(六一八—九〇七)の歴史を記した書物である。

本書は、後晋の天福六年(九四一)から編纂が開始され、開運二年(九四五)に完成した。編纂を主導したのは趙瑩(八八五—九五二)であり、撰者として名前があがっている劉昫は、『旧唐書』の編纂に一年ほどしか従事していない。

劉昫(八八七—九四六)は、字は耀遠、帰義(河北省保定市雄県)出身の人。後唐に仕えて翰林学士、端明殿学士となり宰相も務めた。その後、後晋の武帝の招聘を受けて『旧唐書』の編纂に従事した。

【版式】

左右双辺(二一・三糎×一四・三糎) 有界 每半葉一四行 每行二六字 注小字双行 版心白口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏伝家図書」の印が、每冊首にあり。

「林氏蔵書」の印が、每冊首にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾（第三七冊のみ欠）にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

【刊行年代等】

●明嘉靖一七序刊（聞人詮）…当館目録、六四頁（下段）。

056 唐書 二二五卷 唐書釈音二五卷

五〇冊（宋）欧陽脩等奉勅撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八一—〇〇二五〕

『唐書』は、李淵（五六六〜六三五）が建国した唐王朝（六一八〜九〇七）の歴史を記した正史で、欧陽脩（一〇〇七〜一〇七二）等が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収の「66 唐書」（九九頁）を参照。

なお、第一一冊尾に「寛永辛未四月晦 羅山一考」の朱書あり。「寛永辛未」は「寛永八年」（一六三一）にあたる。

【版式】

左右双辺（二二・三糎×一四・四糎） 有界 每半葉一〇行 毎行二二字注
小字双行 版心白口 単黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏蔵書」の印が、每冊首にあり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每冊首、每冊尾にあり。

「大学校／図書／之印」の印が、每冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

「内閣／文庫」の印が、第一〇冊の冊首・冊中・冊尾のみにあり。

※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆二三刊（北監）…当館目録、六四頁（下段）。

057 五代史記 七四卷

六冊（宋）欧陽脩撰 徐無党注

林羅山旧蔵〔請求番号 二八一—〇〇二一〕

『五代史記』は、唐王朝の滅亡（九〇七）から宋王朝の成立（九六〇）までの間、黄河流域を支配した五つの王朝、「後梁」・「後唐」・「後晋」・「後漢」・「後周」の歴史を記した正史で、欧陽脩（一〇〇七〜一〇七二）が撰述したものである。本書の内容や撰者については、拙稿③『北の丸』第45号所収の「70 五代史記」（二〇二頁）を参照。

【版式】

四周双辺（二〇・五糎×一四・〇糎） 有界 每半葉一〇行 毎行二二字注
小字双行 版心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。

「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「大学校／図書／之印」の印が、每冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

「内閣／文庫」の印が、每冊首、每冊中、每冊尾にあり。

※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明万曆四刊(南監) ……当館目録、六五頁(上段)。

058 東萊校正五代史詳節 一〇巻

林羅山旧蔵〔請求番号 別〇五二一〇〇〇五〕
一冊 (宋) 呂祖謙編

『東萊校正五代史詳節』は、歐陽脩が撰述した『五代史』の中から重要な記事を抜粋した歴史書で、呂祖謙が編纂したものである。本書の内容や編者については、拙稿③『北の丸』第45号所収)の「72 東萊校正五代史詳節」(一〇三頁)を参照。

【版式】

左右双辺(二五・七糶×一〇・四糶) 有界 每半葉一四行 行二四字注
小字双行 版心線黒口 双黒魚尾 耳格(小題を記す) あり

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、冊首にあり。

『北の丸』第48号 当館所蔵 林羅山旧蔵書(漢籍) 解題②

「林氏／蔵書」の印が、冊首にあり。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、表紙、冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、冊首にあり。

【刊行年代等】

●宋刊：当館目録、六五頁(上段)。

●宋刊本：「関東現存宋元版書目」、二四三頁。

●元刊：「宋元版所在目録」、八八頁。

●〔元〕刊：「日本現在宋元版解題 史部(下)」、二七頁。

059 遼史 一一六巻

八冊 (元) 脱脱等奉勅撰
林羅山旧蔵〔請求番号 三二〇一〇〇四一〕

『遼史』は、耶律阿保機が建国した遼王朝(九一六〜一二二五)、「契丹」・「大遼」ともいう)の歴史を記した正史。契丹族・耶律氏の耶律阿保機(八七二〜九二六)は、諸部族を討伐して勢力を拡大すると、神冊元年(九一六)に皇帝を称して国号を遼とし、満州からモンゴル高原東部までを支配下に収めた。さらに第二代・耶律徳光(九〇二〜九四七)は、燕雲十六州(北京・大同周辺の地域)を支配し、中国本土へと勢力を拡大した。王朝は、保大五年(一二二五)に第九代・天祚帝が金に捕らえられて滅亡した。本書は、元の順帝の勅命を受け、至正三年(一三四三)に脱脱の主導によって編纂が始められ、至正四年(一三四四)に完成した。契丹語の意味を漢訳した「国語解一卷」を附するのが特徴である。

脱脱（一三二四～一三五五、托克托）は、字は大用、メルキツト（モンゴル高原北部の遊牧民族）出身の人。至元四年（一三三八）に御史大夫となると、元の順宗を補佐して綱紀の肅正をはかり、その手腕が評価されて丞相となった。後に『宋史』・『遼史』・『金史』の編纂を統括し、一三四三年に『金史』、一三四四年に『遼史』、一三四五年に『宋史』をそれぞれ完成させた。また、元末の反乱を討伐するなどの軍功も挙げたが、讒言によって雲南に流刑となり、その護送中に毒殺された。

【版式】

左右双边（二一・四糎×一五・〇糎） 有界 每半葉一〇行 毎行二字 版心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。
「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。
「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、毎冊尾（第二冊のみ欠）にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明嘉靖八刊（南監）…当館目録、六五頁（下段）。

060 金史 一三五卷

二〇冊 （元）脱脱等奉勅撰
林羅山旧蔵〔請求番号 三二〇—〇〇四四〕

『金史』は、完顔阿骨打が建国した金王朝（一一一五～一二三四）の歴史を記した正史。女真族・完顔氏の完顔阿骨打（二〇六八～一一二二）は、遼に対抗して収国元年（一一一五）に即位し、天会三年（一一二五）には遼を滅ぼし、天会五年（一一二七）以降は中国の淮河以北の地を支配した。王朝は、天興三年（一二三四）に第九代・哀帝がモンゴルと宋との連合軍に追い詰められ、自殺したことで滅亡した。

本書は、前掲「059 遼史」と同様、元の順帝の勅命を受け、至正三年（一三四三）に脱脱の主導によって編纂が始められ、至正五年（一三四五）に完成した。
脱脱については、前掲「059 遼史」を参照。

【版式】

左右双边（二〇・九糎×一五・〇糎） 有界 每半葉一〇行 毎行二字 注小字双行 版心線黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一・四冊首にあり。
「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。
「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙（第九・一二冊のみ欠）、毎冊尾にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

※林鷲峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明嘉靖八刊（南監）…当館目録、六五頁（下段）。

五〇冊 (明) 宋濂 等奉勅撰

林羅山旧蔵〔請求番号 二八一—〇〇三六〕

『元史』は、モンゴル高原から中国までの広大な地域を支配した元王朝(一二七九—一三六七)の歴史を記した正史。元王朝は、モンゴル帝国第五代皇帝のフビライ(一二一五—一二九四)が、至元八年(一二七二)に国号を「大元」と改めてから始まるが、『元史』はチンギス・カン(一一一六—一二二七)から順帝までを収録する。

本書は、洪武二年(一三六九)二月、明の朱元璋(一三三八—一三九八)の勅命を受けて宋濂らが編纂を開始し、同年の八月に早くも完成した。しかし、記述などが疎略であったため、再度の編纂が命じられて修正が加えられたが、それでもなお多くの不備が残っている。

宋濂(一三一〇—一三八一)は、字は景濂、号は潜溪、浦江(浙江省金華市浦江県)出身の人。元の順帝から翰林院編修を授けられたが、仕官せずに東明山に隠れて著述に専念した。朱元璋の求めに応じて仕官し、江南儒学提挙となり、皇太子教育係なども務めた。官職は翰林学士承旨・知制誥にまでなり、洪武一四年(一三八一)に七十二歳で没した。

【版式】

四周双边(二四・八糎×一六・二糎) 有界 每半葉一〇行 每行二〇字版
心中黒口 双黒魚尾

【蔵書印等】

「江雲渭樹」の印が、第一冊首にあり。
「林氏／蔵書」の印が、每冊首にあり。
「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙(第一・二・四・六・八・一一・

二六・三〇・三三・三四・四〇・四四・五〇冊欠)、每冊尾にあり。

「大学／蔵書」の印が、每冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

※林鷺峯手校手跋本↓「手跋」は附録参照。

【刊行年代等】

●明刊(南監・嘉靖修)：当館目録、六五頁(下段)。

附録

自身が所蔵する「正史」を読破するという目標を立てた林鷺峯(一六一八—一六八〇、名は春勝・怒、羅山の三男、林家第二代)は、一つの正史を読み終わるたび、巻末に跋文を記して読破の証拠とした。

林羅山旧蔵書のうち、以下の一五種について、鷺峯の跋文が残っており、ここにその跋文を収録する。

044 晋書 第一九冊尾【寛文一〇年(二六七〇)五月中旬】

晋書不一臧榮緒王隱所作今不伝唯唐太宗所撰專行于世蓋後於臧王而択之詳者乎余昔見通鑑知司馬氏興廢然有周覽晋書之志未果近歲史館之暇或一朝或一夕有須臾之閑則採而見之多則一卷少則數葉然他書日課各有所定而見之稀矣自己酉之秋資始至庚戌之夏紀志列伝載記全部百三十卷悉加朱句了是亦稽古之助学而不倦之効乎寛文十年庚戌五月中旬弘文学士林叟跋

045 宋書 第二〇冊尾【寛文二二年(二六七二)一月下旬】

余見宋書始於庚戌之冬既畢本紀以定式日課繁多故中輟然歴史全覽之意無敢忘焉至今夏再起或朝食之前或深更之後往々讀之不定其日不限其時以為余暇

之務而不妨定日之課朝々之累夜夜之積至中冬之季三十志六十伝併本紀總百卷悉加朱句訖雖不及古人惜分陰非空送駒隙之比者乎嗚呼劉宋八主曆數僅逾半百然記事之詳至百卷是以休文為良史乎然時南北分爭外難不絶皇族相屠内難頻起英雄功臣亦全身幾希是以紹運不永久也何方得一見此書者相共可談大概寛文壬子十一月下旬林学士跋

046 南齊書 第八冊尾【寛文一三年(一六七三) 四月一四日】

南齊書紀志伝五十九卷九百八十餘葉每葉豎十八字横十八行括為八冊自壬子冬之仲至癸丑夏之始遂一覽之功点朱句畢但每日之課者有定規此是閑暇之余務而已蕭齊有江左七主纔廿三年於君臣之履歷則雖不足觀然經史云文学云不為無其人且有良政高逸孝義之可取則子顛亦是一代之史才而滿簡帶班馬余香者乎寛文十三年癸丑孟夏望前一日弘文院学士跋

047 梁書 第六冊尾【寛文一三年(一六七三) 五月二〇日】

梁書全部五十六卷自夏孟之中旬開之經三旬半周覽加朱句了但定式日課余暇之務也熟視則梁武在位殆五十年君臣和睦全身克終与宋齊殺害之多非同年之談而學術才芸亦不為無人也然好仏之甚流浴ユク之弊捨身之語果為餓死之笑可以為鑑戒也姚思廉不生於其世而記其事備矣蓋夫有所家伝乎寛文癸丑五月二十日弘文院林叟跋

※「浴」：『文集』は「俗」に作る。

048 陳書 第四冊尾【寛文一三年(一六七三) 六月中旬】

陳書紀六卷列伝三十卷以日課余暇畢全部周覽之功高祖以武威匡江左開帝業世祖以姪嗣祚高宗以庶奪嫡後主滅於隋其興廢備於一覽將相履歷亦昭然孝子儒林文学亦不為無之雖為小部亦是一代之史也思廉可謂繼父之志者也寛文癸丑季夏中旬学士林叟跋

049 魏書 第一九冊尾【延宝二年(一六七四) 五月一九日】
北魏書跋

魏書紀伝志総百三十卷一覽加朱畢魏收撰史在北齊之始則魏末之事所面視而所伝聞亦不遠矣收之為人公正故記事之間不為無私既蒙穢史之名且多闕卷而後人以他書補之不有無遺恨然拓跋主中原累世之久載而不遺筆力亦不拙則乃是一代之史也不可不誦延宝二年五月十九日弘文院林学士跋

050 北齊書 第四冊尾【延宝二年(一六七四) 六月二三日】

北齊書紀伝合五十卷一覽加朱周月終全部之功高歡善用兵開一方之基是亦非常之人也然長子不克終三帝代繼踐阼叔姪殘害淫虐昏乱以暴易暴四世而亡自取天譴觀此史者誰不鑑戒哉延宝甲寅季夏二十三日鵝峯林叟跋

051 周書(後周書) 第六冊尾【延宝二年(一六七四) 九月一二日】

周書五十卷自六月末披之加朱(句)至今日全部一覽訖抑宇文氏之治世太祖創業武帝成功非高齊之比若使武帝保寿則南北混一豈待隋氏乎然嗣子不肖而禍生外戚可以痛恨焉延宝甲寅九月十二日林学士跋

※「」は欠字。『文集』により補う。

052 隋書 第二〇冊尾【延宝三年(一六七五) 五月一九日】

隋書紀志伝総八十五卷自今歲三月中旬至五月十九日而一覽滴朱露畢典午蒙塵以來華夷並立南北割據隋初成混一之功然纔至二主而亡蓋其得之不以道之所致乎以暴取之以暴失之為唐驅民者天鑑昭昭不在茲哉延宝三年乙卯五月十九日弘文院林学士跋

※「得」：『文集』は「得」に作る。

054 北史 第三〇冊尾【延寶三年（一六七五）三月一六日】

北史紀傳百卷括為三十冊總三千余葉自甲寅之冬至乙卯之春電覽加朱句了收拾魏齊周三史而益加隋事想夫隋雖起於北然暫成混一之功延壽猶列於北朝者蓋尊唐以繼漢晉之微意乎我先見宋齊梁陳各書而見南史今復見魏齊周史而見北史則彼此七代如再過陳跡似相逢旧識而不厭簡帙重堆之多唯恐老色日催不遂余史之周覽而已延寶乙卯春三月既望弘文院林學士跋

056 唐書 第四九冊尾【延寶三年（一六七五）二月三〇日】

歐宋新唐書紀表志傳總二百二十五卷周覽加朱句畢想夫三代之後曆運之久無過漢唐然漢分西東則有不及唐乎但萃其盛而言之則貞觀開元而已武德猶未平北狄高宗中宗惑於武韋殆失國家睿宗祚短天寶亂後肅代德之間北風不靜京師屢騷順宗不言早崩元和雖有興復之功不能克其終穆宗以降日衰日壞終至於亡滅也三百年之久治少而亂多矣治亂之本雖依君之明與昏亦是臣之正與邪之所成也可不戒哉若以人物言之則宰相則有房杜王魏姚宋張韓大將則有靖勣郭李西平父子諫臣則有陸贄陽城儒臣則有孔陸韓愈詩文則少陵太白柳劉元白濟々惟多不亦盛乎此亦不可不知焉延寶乙卯臘月除夜弘文院林學士跋

057 五代史記 第六冊尾【延寶四年（一六七六）三月五日】

五代史七十四卷自今春正月開卷至上巳翌日全部周覽終朱句之功嗚呼梁唐晉漢周一興一亡變態須臾如奕碁間似一場夢時維暮春之初花開花落朝榮暮辱有感於朱李石劉郭之存亡云爾延寶丙辰三月五日弘文院學士林叟跋

059 遼史 第八冊尾【延寶五年（一六七七）一月三〇日】

遼史紀志表傳凡百十六卷曆三旬而周覽加朱句畢遼起自北狄并吞隣國威伏四夷勢抗中國然華夷之尊卑不可不弁焉昔劉石慕容苻姚之奪中國猶附於晉書載

記今別編史與宋史相並而做北魏齊周之例者遼金二史之作成於元朝故自遼而金自金而元共為中國正統之意乎諛者不可不知也延寶五年丁巳正月大尽日弘文院林學士跋

060 金史 第二〇冊尾【延寶五年（一六七七）四月七日】

金史紀表志傳總百三十五卷周覽加朱句終全部之功金本女真北狄之微者也以武興國滅遼而擊宋虜二帝遂主中原也先是夷狄之強盛未有及此者太祖太宗之武功不亦大乎世宗與南宋約和偃武西北之士民安措手足有小堯舜之名然傳世九世其中逢弑者三其取奪猶是骨肉之際未至失社稷及蒙古之起百戰百敗遂至族滅嗚呼一興一廢奈天運何延寶丁巳孟夏七日弘文學士林叟跋

061 元史 第五〇冊尾【延寶五年（一六七七）七月二十二日】

元史紀志表傳總二百十卷自今茲夏之初至孟秋之末周覽加朱句終全部之功元起于北胡一統中原世人雖厭腥風漠塵然太祖太宗世祖皆英雄之主而其將相不乏人且趙復始伊洛之風許衡最尊朱子之學其餘儒雅之士歷歷忠臣孝子烈女高尚之輩並出不少矣所謂夷狄之有君不如諸夏之亡也不亦宜乎算其代則十四算其歲則百六十其際有叛姦之臣其季有昏亂之主以至亡國家者天運之極也凡有喪者必有興者古來皆然豈啻元而已哉我家元史古板旧刻文字漫漶假道三氏新梓鮮明者補其闕滅不滯披說可謂幸也余初弱冠再見三史修本朝通鑑之余暇見三國志晉書其後累年春少窺園夏分囊螢之光秋對屋梁之月冬映雪後之灯朱露滴盡筆頭枯秃數千萬葉之紙卷舒以見軸末二十一史之編紬繹以至卷尾嗚呼先考之遺命聊可以報之微力之精勤亦有其効乎時維延寶五年丁巳秋七月二十三日偶當先考諱日終此大舉不亦奇乎乃記其來由貽厥孫謀是日弘文院學士林恕跋

（統括公文書專門官室職員）